

植民地の「現実」を規定する

——ロンドン文壇における一八九〇年前後のキプリング受容——

小沢 自然

はじめに

一八八九年、ラドヤード・キプリングは、新聞記者兼作家として七年あまりを過ごした植民地インドを去り、イギリスへ「帰国」した。翌年の一八九〇年、それまでに出版していた作品が批評家たちの注目をにわかに集め、キプリングは華々しくロンドン文壇に登場する。さらに、この時期に発表をはじめた、兵隊を題材とする詩が爆発的な人気を博し、流行作家としての彼の地位は不動のものとなる。

彼の初期作品の多くは、「本国」にも植民地にも完全には同化できない、植民者のアイデンティティの問題を扱っている。それでは、このような「本国」と植民地の文化的距離の問題は、メトロポリス^{〔1〕}の側ではいかに捉えられていたのだろうか？ それとしてこのことは、キプリングが人気を得たこととどう関連しているのだろうか？ 本論では、この問題を具体的に探るために、

一八九〇年前後のイギリスにあらわれた、キプリングについての書評を分析する。批評家たちが、遠く離れた植民地の「現実」をどのように想像していたのか、そしてそのことが彼らのキプリングの読みにどう影響したのかを考察してみたい。

当時のキプリング書評についてはアン・パリーによる優れた先行研究があり、本論においても彼女の議論を何度か参照することになるだろう。しかし、ここでの関心は二つの点でパリーとは異なっている。第一に、彼女はキプリングの詩の書評のみを扱っているのだが、ここでは彼の散文についての批評も分析の対象とする。第二に、「テキストと読者を結びつけ、特定の相互関係を形成する^{〔2〕}」という意味でのリーディング・フォーメーション^{〔3〕}の観点から、パリーは資料を読み解いているのだが、本論はむしろ、植民地に対する「本国」側の具体的な反応の例として書評を分析する。そうすることで、異文化に対する「まなざし」のあり方という、比較文学の重要な研究課題の一つに

取り組んでみたい。

一、リアリスティックなロマンスという評価

一八九〇年前後のキプリング書評に顕著な特徴の一つは、新進作家の紹介という側面を考えれば当然のことかもしれないが、彼のインド経歴が強調されていることである。その具体例として、彼の短篇集『高原平話集』(Plain Tales from the Hills, 1888)についての『サタデー・レビュー』誌の書評から次の一節を挙げることができる。「英国領インドの住民や、(キプリングが勤めていた)『シヴィル・アンド・ミリタリー・ガゼット』紙の購読者は、『高原平話集』というタイトルの意味を知っていて、その本を急いで手に入れようとするのかもしれない。しかし、ロンドンやイギリス全国の見聞の狭い住民にとつては、『ベウラからの率直な話』と題された本と同じくらい、熟読しようという気にはならないタイトルである」³⁾。ここでキプリングは、植民地通ではあるが、「本国」の文化状況には疎いナイーブな作家として描き出されている。「見聞の狭い」のはキプリングのほうだといわけだ。しかし重要なのは、このアイロニーは、「本国」と植民地のあいだの文化的差異を前提としてはじめて機能するということである。バート・ムーア・ギルバートも指摘しているように、当時のインド在住イギリス人は、

彼らのインド体験ゆえに、「本国」の「普通」のイギリス人たちとは文化的に異なるものとして自らを意識していた。「本国」の側もまた、彼らを奇異の目で眺めるといふかたちで、その独自性を認識していたのだ。⁴⁾ この文化的独自性は、当時「アングロ・インディアン」という語が、彼らを指す言葉として定着していたことに端的にあらわれている。以下の議論では、「アングロ・インディアン」という言葉をこの古い意味で用いて、彼らの「本国」との距離感を強調することにしよう。

植民地人のもつこのような文化的差異のゆえに、キプリングのテクストは異国趣味文学の一種として歓迎されることとなる。このコンテクストにおいて、キプリング人気の確立にもつとも貢献した一人が、「大衆的支持の点では、一八八〇年代、九〇年代にもつとも影響力を持っていた」と評されるアンドルー・ラングである。ここでは彼の重要性にかんがみて、彼が本格的にキプリングを論じたエッセイの一節を長めに引用しておくことにしよう。

従来はもっぱら退屈な場所とみなされてきたインド大陸を、本物の驚異と魔法に満ちた魅力的な場所として、キプリング氏は提示してくれた。実際のところ、異国趣味文学好きが昨今高まっている。ヨーロッパとアメリカ合衆国以外の世界の

奇妙さと魅力に人々が気づくようになったのだ。しかしそれは、想像力と文学的技術をもった人々が新たな征服者であったからに他ならない。彼らは、インド、アフリカ、オーストラリア、日本、南海の島々におけるコルテス、バルボアだ。ピエール・ロチ氏の洗練さをもって書こうが、あるいはポルトゥウッド氏の乱雑さをもって書こうが、これらの征服者たちは、少なくとも新世界を自分自身の目で見た。彼らは人口が多すぎる通りを抜け出して広々とした土地へと赴き、船に馬に乗り、歩き、狩りをした。要するに、町の霧と煙から逃げ出したのだ。新鮮な空気を吸って得た新しい力が彼らの心と体に入ったからこそ、彼らの語る物語には新しさと快活さがある。したがって、彼らの著作の本質的な真実がどれだけ現実的なものであっても、彼らはリアリズム作家というよりはロマンス作家とみなされるべきだ。彼らには見たり記録したりすべきものがたくさんあるので、顕微鏡を使って品性をこと細かに見ることをしない。特にフランスにおいてリアリズムがたいそう注目を集めているのは、それが新しいものだから。かつツラ氏たちもまた、征服すべき新世界を見出したからだ。しかしこの世の中には、過去の探検家たちが知っていてあえて無視してきた場所がある。それは生と品性の「悪しき土地」だ。この「悪しき土地」に泥塗りの家やあばら屋を築くより

は、まったく新しい領域を求めめる方が賢明というものである。^⑥

「異国趣味文学好み」がいかんにして出現したのかを正確にたどることは難しい。しかし、「コルテス」「バルボア」といった過去の植民地探検家たちへの言及が端的に示しているように、十九世紀末の帝国主義が一つの要因であったことは間違いない。にもかかわらず、二つの点で解放感をもたらしてくれるものとして、ラングは「異国趣味文学」を手放しに歓迎する。第一に地理的な意味での解放である。作者自らの海外体験を素材とする「異国趣味文学」は、「町の霧と煙」と「人口が多すぎる通り」に象徴される、「西洋」からの想像上の脱出を読者に可能にする。開放的な非西洋という眉唾ものの概念が、急速に進行する近代化に疲れた「心と体」を活性化するものとして、ここでは捉えられている。第二に、ラングにとつて「異国趣味文学」の高まりは、従来主流となっていた文学からの解放をも意味していた。すなわち、フランス自然主義に強く影響されていたリアリズム小説に対抗する形であられた、ロマンスの再流行である。文学手法のみならず主題の点でも、ラングは後者を高く評価する。リアリズム／自然主義の「悪しき土地」——すなわち都市化に伴う社会の諸問題——に対する擬似科学的な

興味は、人間のエコイズムの醜態をあますところなく抽出するが、ロマンス／異国趣味文学は、「驚異と魔法」を筆太に描くとされる。キプリングを含むロマンス作家たちは、「本国」の悲惨さを過度に強調する自然主義から読者を解放し、異国の「新鮮な空気」を提供するというわけだ。

リアリズムとロマンスの対峙というこの問題については、その名も「リアリズムとロマンス」と題する別のエッセイの中で、ラング自身が考察している。この中でラングは、「冒険の描写、すなわちロマンス物語の快楽」と、リアリズムによつて表現される「挙動と品性の研究」という二つの要素から、小説は構成されているとする。ラングはこの二つの要素は不可分であるとしながらも、「リアリズムはしばしば、愉快な現実よりも不愉快な現実をより多く見出す傾向にある」と不満を述べ、さらに「リアリズム作家たちは、確かに真実を私たちに示してくれるとはいえ、どちらかといえば望ましくもなく、かつ一般的でもない真実の側面をもつとも好んで示す傾向がある」と、リアリズムの社会認識のあり方そのものに疑問を呈する。「どちらかといえば望ましくもなく、かつ一般的でもない」という表現は、文学者はいかなる社会的責任をもつて、いかに「現実」を知覚するべきなのか、ここでの真の問題であることを物語っている。この観点からすれば、ハガードやステイブンソンの人気が

を背景として、一八八〇年代後半に活発に議論されたリアリズムとロマンスの対立が意味したものは、単なる文学ジャンルの違いにとどまらず、文学の「現実」描写の根底にある社会文化的な価値観の問題でもあったことが見えてくるだろう。¹⁵⁾

このことはリアリズムを擁護する側の議論を見ても明らかだ。例えばある批評は、ロマンスは「言葉のある種の謙虚さと節度、知的な語調のある種の穏健さ」を欠いており、「悪意あるとは言わないまでも意識的な軽薄さ」がその特徴であると非難する。ロマンスというジャンルが知的に低級であるという評価自体は何ら目新しいものではない。しかしここで興味深いのは、ロマンスはその「軽薄さ」ゆえに、「ありそうもない事件に訴える煽情主義」¹⁶⁾を取らざるをえないとこの批評が主張していることである。要するに、その「非現実性」がロマンスの致命的な弱点であるとされているのだ。ギリアン・ピアも指摘するように、ロマンスは欲望の充足を常に志向するジャンルである。ラングが「愉快な現実」「不愉快な現実」という疑わしい区別を持ち出すのはそのためだ。しかし、この欲望充足への志向ゆえにこそ、ロマンスは社会的「現実」から遊離、逃避しており、したがって知的にも劣っているという批判を招くことになる。

ラングがキプリングを熱烈に歓迎したのは、このような論争

の文脈においてであった。先に引用した一節において、作家たちの異文化体験こそが、異国趣味文学を根本的に支えているとされていたことを想起しよう。クリフォード・ギアツは、エスノグラフィの信憑性は、エスノグラフィヤーが実際に異文化に透入したことを読者に説得できるかどうかにかかっているとし、これを「あちら側にいたことの権威」と呼んでいる。この「あちら側にいたことの権威」を喚起することで、ラングは異国趣味文学のリアリズムを強調する。そのうえでラングは、この文学の主題的本質がロマンスであると断じてみせる。つまり、キプリングの作品は、彼自身のインド経験に依拠しているがゆえにリアリズム的でもあり、したがって「非現実性」という致命的弱点を克服したロマンスであるとされるのだ。「キプリング氏の作品は、優れた作品がすべてであるように、リアルでありかつロマンス的である。リアルなのは、彼がとても素早くかつ鋭くものを見、感じているからだ。そしてロマンス的でもあるのは、彼が、ロマンスの本質、つまり冒険の魅力と可能性に対する慧眼の持ち主であるからだ」と、彼の議論の趣旨から言えば若干矛盾する評価を、ラングは下してはばからない。重要なことに、この類の議論を展開したのはラングだけではない。エドモンド・ゴスはやはり当時影響力が強かった批評家で、ラングよりは遥かに知的な議論を発表していた。しかし彼

の論点も、実はラングにかなり近いのである。

(キプリングの文壇登場以前には) アンゲロ・サクソン世界の知的小説は、奇妙にも女性的になっていた。英国でもアメリカでも、繊細な印象を読者に与えようとする小説家たちの嗜好は極端に洗練され、判断は極端に控えめになっていった。自己意識のひだまでありますことなく、隣人の心を探るのを好まないならば、ライダー・ハガード氏とともに「月の山」へ向かう船に乗りこむより他に手段はなかった。つまり、アンゲロ・サクソンの小説世界においては、過度の心理分析と過度に超人間的なロマンスとのあいだに、大きな隙間があったのだ。この隙間をキプリング氏は、その異国趣味的リアリズムと珍しい経験の生き生きとした描写によって埋めたのである。彼の気質は著しく男性的であるが、それでいて彼のイマジネーションは厳然として現存の諸原理の範囲内にある。¹¹⁾

ラングの攻撃対象は自然主義的リアリズムだったが、ここでゴスが問題としているのは、ヘンリー・ジェームズ流のリアリズムだと思われる。ゴスによればこのリアリズムは、その洗練されすぎた「過度の心理分析」ゆえに「女性的」なものである。一方、ハガード風のロマンスは、「男性的」ではあるが、「超人

間的」、つまり非現実的なものとされる。そこでゴスもまた、このジレンマの解決をキプリングに求めるのだ。対立する二つのジャンルの中にキプリングを置くことで、ゴスは彼のテクストをリアリステックでかつ「男性的」であるとみなす。ここでも彼の評価の根拠になっているのは、「異国趣味のリアリズム」、すなわち、キプリングがインドを実際に体験したという、「あちら側にいたことの権威」に他ならない。

と同時に、リアリズム小説とロマンスの中間にキプリングを位置づけることで、前者の長所、すなわち適度な心理描写をも彼のテクストに見出すことが比較的容易になるだろう。この点におけるゴスの批評は後に見ることにして、ここでは別の例を挙げよう。自身も官僚としてインドに勤務した経験を持つウィリアム・ハンターは、「(アングロ・インディアンを詠ったキプリングの詩は、) 実在の男性、女性たちが考え、感じたことを反映しており、(中略) 真実のものだ」と評価する。キプリングの詩は、実在するアングロ・インディアンたちの思考と感情が結晶化したものだというわけだ。アン・バリーが鋭く指摘しているように、このような批評が前提としているのは、主観的な真実なるものはリアリズムを通じて把握することができるという、「理想主義的リアリズム」観である¹⁵。この「理想主義的リアリズム」ゆえに、キプリングはより完全な意味での植民地

インドのインフォーマントとみなされることになる。彼が「本国」へもたらす文学は、異国の「正確な」風景描写のみならず、そこに住む人々の主観的、心理的真実をも伝えるものとされるからだ。

以上検討してきたように、程度の差こそあれ、キプリングに好意的な批評に共通しているのは、彼のテクストの背後に植民地インドの「現実」を想像したいという欲望なのである。

二、「現実」を選択する

ただし、ここで一言断っておかなくてはならないのは、スベースの都合上詳しく立ち入る余裕はないが、キプリングの作品自体が、植民地インドの「現実」を伝えるという体裁をしばしば取っていることだ。その意味で、キプリングの文学的成功はあくまでも、彼のテクストと批評家を含めた読者たちの相互関係から生まれたものである¹⁶。このことを十分に心に留めたいうえで、キプリングがキャノン化されるプロセスにおいて書評が果たした役割について、さらに考えてみたい。

アン・バリーは、この問題を探るのに有効な出発点を提供してくれている。先述したように、バリーはリーディング・フォーメーションを理論的枠組みとして用いており、そこで、雑誌こそが、「十九世紀におけるイデオロギーの生成過程の重要な

場であり、支配的な概念や価値観に対してある特定の姿勢を讀者にとらせるのに明らかに重要であつた」と主張する。確かに、讀者を「正しい」テクストの読み方へと導くのに書評雑誌が果たした役割を強調する彼女の議論には説得力がある。しかし、ここでむしろ着目したいのは、特定の影響を及ぼすまさにその過程において、何が「支配的な概念や価値観」であるのかが陰に陽に定義され、明確にされることなのだ。このように価値観が規定されるからこそ、批評は「イデオロギーの生成過程の重要な場」として機能するのである。これまでの議論に即していうならば、キプリングに対するメトロポリスの書評が、彼のインド描写をリアルなものと解釈するとき、その描写の対象である植民地の「現実」に内在するとされる、社会的、文化的価値観も同時に規定されている、ということになるだろう。エドワード・サイードは、「事実とはそれ自体で存在するのではなく、社会的に認められた物語を必要とする。この物語が、事実を吸収、維持し、循環させるのだ」と指摘する。このことは——オリエンタリズムがその典型なのだ——、異文化に対するある「まなざし」が、より大きな文化的枠組みにおいて、何らかの正当性を獲得する場合に特に当てはまるだろう。だとすれば、キプリングのテクストの中に植民地の「事実」「現実」を見出すことを可能にする「社会的に認められた物語」を提供したの

が、メトロポリスの批評家たちなのだ。

ロンドン文壇のこのような役割は、キプリングの作品がその主題によって異なった評価を受けていることに端的にあらわれている。概観的に言えば、インド人およびイギリス人兵士を扱った物語はそのリアリズムゆえに賞賛されるのに対し、アングロ・インディアンを主題とする作品は稚拙なものとして退けられる傾向にある。以下、このような評価がもつ意味合いを具体的に検討してみよう。

インド人を主要登場人物とする短篇は、批評家のあいだでかなり人気が高い。例えばランゲは、「(そのような短篇の一つである「スドゥフーの家」(『In the House of Suddhoo', 1886)を読めば)公文書やうわべだけの旅行記によるよりも、教育のない現地人が信じていることについてはるかに多くのことを知る」ことが出来るだろうと述べている。「公文書やうわべだけの旅行記」との対照は、「現地人」の心理的深みを探るのにキプリングが成功しているという肯定的評価のあらわれである。「理想主義的リアリズム」をこのように強調することで、キプリングのインド表象は肯定、裁可される。と同時に、キプリングの植民地表象が「現実」を忠実に反映しているとされるとき、そもそも何が「現実」であるのかが規定されるのだ。

このことをより明確に示しているのが、『ザ・ブックマン』

誌の一書評である。インド描写の正確さこそがキプリングの魅力だとするこの書評者は言う。

一方では、インドをととてもよく知っている人が——ひよつとするとともに知悉している人と言うべきかもしれないが——キプリングの描く現地人の性格と考え方は、皮相的で限られた観察に基づくものであり、単に素晴らしい想像力の産物でしかないと私に言った。他方で、彼の描くヨーロッパ人は私自身の経験と食い違うことはめつたにない。また、それよりはずつと面白い彼の東洋的な要素も、バートンやメドウズ・テイラーといった大家が残した印象を強めこそすれ、それと矛盾することはない。²⁰⁾

「インドをととてもよく知っている人」は、キプリングのインド人表象の信頼性に疑問を投げかけるわけだが、書評者はまず、キプリングの描くヨーロッパ人が醸し出すリアリティックな印象を強調することで、この疑問を回避しようとする。続けてこの書評は、キプリングの短篇は、「その幾つかは完全な創作だが、選びぬかれたものであり、その一つ一つにあらかじめきちんと整理された彼の観察が織りこまれていく。その結果、個々の作品はあたかも彼自身の経験のように読めるのだ」と主

張する。ここでも「観察」と「経験」という言葉が、キプリングの「あちら側にいたことの権威」を喚起し、それが彼の作品の信憑性を保証するものとされる。そのうえで書評者は、「正しいものであるとなかろうと、キプリングの作品は真実である——そうであるに違いないのだ²¹⁾と結論する。「そうであるに違いないのだ」という語句には、知的判断よりむしろ、キプリングの描写を通じて、実在するインド人を想像、理解したいという書評者の欲望が露呈している。

しかし、「現地人」を登場人物にもつすべての物語が評価されてきたわけではない。キプリングがインド時代に発表した短篇「獣のしるし」(“The Mark of the Bear”, 1890) は、ラングをはじめとする批評家たちに、その雰囲気がいまにも興味悪いという理由で酷評されている。事実たった今引用したばかりの『ザ・ブックマン』誌の書評でさえ、この物語を論じながら、「キプリングは、腐敗した死体、激しい苦痛、飛び散る血といった、ジャーナリティックな「恐怖」、「ショックングな発見」に対する病的な好みをまだ捨て切れていない。このような「恐怖」はショックを与えたりはしない。ただ嫌悪感をかきたてるだけだ²²⁾と非難するのだ。しかし、「獣のしるし」は、アングロ・インディアンである語り手とその友人で警官のストリックランドが、仲間を救うためにやむをえずインド人に対してふる

う暴力を描いていることを忘れてはならない。だとすれば、物語に対するこのような否定的な評価は、植民者のリスベクタビリティを規定、維持しようとする試みのあらわれとみなすこともできるだろう。「我々はイギリス人としての自分を永久に汚してしまったのだ」^④という語り手の告白はおろか、物語そのものを完全に無視することで、メトロポリスの想像力は、植民地における異文化交流がどうあるべきかを限定する。

同様に、イギリス人兵士を主人公とする、いわゆる「兵隊もの」の作品に対する肯定的評価もまた、階級関係のあるべき形を植民地において明らかにしようとする努力としての側面をもつ。紙幅の都合もあるので、ここではゴスの書評を代表例として検討してみよう。ゴスは、従来の小説におけるイギリス人兵士の描写は、「中身がなくて取るに足らないものであるか、あるいは非現実的なまでに感傷的で不愉快なもの」であったとする。もちろんこのような評価は、キプリングの描写はリアリティックかつ非感傷的で、したがって社会的「現実」により忠実であることを暗示する。この「理想主義的リアリズム」観を補強するために、ゴスはキプリング短篇の語りの構造に着目し、「作者は、三人の兵士と暖かい友情を結んだ、ほとんど無口の若い文民の役を引き受けている」と主張する。確かに、キプリングの「兵隊もの」の短篇のほとんどは、「ほとんど無口の若

い文民」によって語られてはいる。また、語り手を作者キプリングと安易に同一視するこの傾向は、何もゴスに限らず、ポストコロニアル・スタディーズ到来以前のキプリング研究にしばしば見受けられるもする。しかし大事なのは、物語世界と物語外界のこのような混同によって、キプリングの作品の中に、実在の兵士たちの心理を読み取れるようになることなのだ。

同時にゴスは、キプリングが描く兵士たちの従順さを強調する。「ムルヴァニーとオルセリスの伝記作家」としてのキプリングは、「英知ある神は、ほとんどいつも粗野でならず者の英国人兵士の心を、幼い子供の心と同じくらい柔和なものに作られた。兵士が、上官を信頼して、胸の悪くなるような厳しい場所へもついでいけるようにである」ということを読者にやすやすと納得させていると、ゴスは評価する。高慢さ丸出しのこの文章は、実はキプリングの短篇「兵士オルテリスの狂気」(『The Madness of Private Othert's', 1888)の一節をそのまま引用したものであり、ゴスの議論はあたかも、この物語が兵士の上官への従順さを主題としているかのような印象を与える。しかし、この短篇が実際に描くのは、ホームシックが高じて、軍からの脱走を試みるオルセリスなのだ。彼が軍逃亡を思いとどまるのは、国や上官への忠誠からではなく、兵士として生きるより他にないことを彼自身が哀しくも自覚するからである。ここ

ろがゴスの引用は、軍隊生活の非人間性を短篇がはからずも暴いていることを完全に隠蔽してしまう。のみならずゴスは、キプリングのテキストの「理想主義的リアリズム」を強調することで、実在の兵士をも、命令に従順で帝国の栄光に寄与する存在に美化してしまうのだ。

これまで議論してきたように、当時のキプリング書評は、植民地のあるべき「現実」を決定しようとする営為でもあったとするならば、アングロ・インディアン社会に題材を取った作品が総じて低い評価を受けていることも、同様の視点から再検討する必要がある。このような評価の典型的な例が、『エジンバラ評論』にあらわれた匿名の書評である。この書評は、「(キプリングは)確かに自在に姿を変えて、英国人兵士や少年鼓手の心に入りこむことができる。しかし、他の領域における彼の人生経験はあまりにも狭い。その結果、召使い部屋のゴシップを盗み聞きしてそれを誇張することで売っている雑誌に出てくるような社会像を、現実と偽って読者に押しつけてしまっている」と不満を述べる。兵士の描写が「心」に象徴される「本物」の文化的価値観を体現しているのに対し、彼の描くアングロ・インディアンたちは、ジャーナリスティックで表面的な「社会像」でしかないというわけだ。

確かに、このような評価を批評家たちの先入観としてののみ片

づけてしまうことは単純に過ぎるだろう。事実、キプリングの「アングロ・インディアン」ものの多くはコミカルな側面が強く、文学としてはいささか軽佻な感じが否めない。しかし、「兵隊もの」および「インドもの」の短篇がその「現実」描写の迫真性ゆえに絶賛される一方で、「アングロ・インディアンもの」に対する評価が著しく劣ることの背後には、単なる審美的判断以上の何かが働いているようにも思われる。

ここで想起したいのは、当のアングロ・インディアン社会が、「アングロ・インディアンもの」の作品群に対してしばしば強く反発していたことだ。アングラス・ウィルソンが指摘しているように、インド時代のキプリングは、「自分より地位が上のものをもつばら批判する、攻撃的なパンフレット書き」であるとか、「傲慢で自分の地位をわきまえていない」などと、特に社会的地位の高い人々からしばしば見られていた。それは逆に言えば、キプリングの「アングロ・インディアンもの」の作品のいくつかが大英帝国のシステムに対する批判として解釈されていたことを意味するだろう。たとえば『高原平話集』に収められた短篇「細菌の破壊者」(“A Germ-Destroyer”, 1887) には、「ご存知の通り、五年に一度われわれは新しいインド総督を年季奉公契約で雇う。そしてそれぞれの総督は自分の荷物とともに個人秘書を輸入するのだが、この個人秘書が「運命」によつ

て実際の総督であつたりなかつたりする。「運命」がインド帝国を運営している。というのもインド帝国はあまりにも大きくて手に負えないからだ」という一節がある。インド総督をはじめとする官僚は「年季奉公」をしているだけで、植民地経営の基盤は脆弱であり、その意味で気紛れな「運命」のなすがままであるというほのめかしには、よりよい社会への希求と表裏一体となつた、現状への強い不満を読み取ることができる。したがつてこのような文章が、諷刺の直接的となつた高級官僚たちの神経を逆なでしたとしても不思議ではない。しかしメトロポリスの批評家たちが、作品の未熟さを理由として「アングロ・インディアンもの」を取るに足らないものとして退けるとき、このようなキプリングの社会批判は完全に抹消されてしまふのだ。

逆説的なことに、キプリングの社会批判が避けられ、封じこめられていくさまは、「アングロ・インディアンもの」に好意的な批評にもつとも顕著である。ここでは、キプリングの第一詩集『お役所の短詩』(Departmental Ditties, 1886) に対するハンターの書評を具体例として取りあげてみよう。彼は「キプリング氏はシムラに集まる人々を滑稽に描いているが、それでも彼らはとてもリアリストイックである」と認めざるをえない。シムラはヒマラヤ山中にあつたアングロ・インディアンのため

の避暑地で、キプリングの物語のなかでは、濃密な人間関係のもと、つかの間の不倫関係が横行するいささかいがわしい場として登場する。先述したとおり、ハンターは「理想主義的リアリズム」をキプリングのテクストに見出ししている。そこで、「彼は自分がともに生きることを余儀なくされた人々に対して、内心怒っているのではないだろうか？」と彼は自問自答するに至る。言い換えれば、キプリングのアングロ・インディアンたちの描写のなかには彼の社会批判的な異議申立てがあることに、ハンターはうすうす気がついているのだ。にもかかわらず——いや、だからこそと言うべきだろうか——、彼は突然話題を変え、キプリングが語るといふ「異郷の熱帯での生活の辛さ」を論じはじめた。

ほとんどの詩に描かれている、享樂的で軽薄な小社会のほかに、もう一つ別のアングロ・インディアン社会がある。この社会は、その崇高な目的と、個々人が努力することにほとんど興味を失っているにもかかわらず、なお努力するその堅実さゆえに、歴史上例を見ない。ひよつとするとこの若き詩人こそがその人なのかもしれないが、いつの日か、この崇高なアングロ・インディアン社会をあるがままに描いてくれる作家があらわれることだろう。そのとき、いかに我慢強く厳し

い自制心によって、インドにいる我が国の男性女性たちが、世界でもっとも偉大な英国の責務を果たそうとしているかが明らかになるだろう。(中略) キプリング氏は、アングロ・インディアンたちの生活のこのような現実をも垣間見せてくれる。彼の真剣な作品こそが今後もっとも期待できるものであろう。^⑩

ここでハンターは、「ほとんどの詩」を事実上無視してまでも、「もう一つ別のアングロ・インディアン社会」を強調する。この社会の特徴は、「我慢強く厳しい自制心」、つまり自己犠牲的な帝国への献身である。この社会像こそ、これまでメトロポリスの人々に知られてこなかった植民地の「現実」であるとハンターは主張し、さらにキプリングが今後描くべきなのは、シムラーの人々ではなく、この「崇高なアングロ・インディアン社会」であるとするのだ。この批評は、単にキプリングを植民地社会の代弁者と位置づけるのみならず、その社会の「現実」の性質まで限定する。そしてその「現実」とは、帝国の使命に身を捧げて奉仕するアングロ・インディアンたちの姿に他ならない。

おわりに

これまで見てきたように、「本国」の批評家たちは、キプリ

ングのテクストを植民地インドの「現実」を忠実に反映するものとして歓迎した。キプリングの作品そのものにこのような解釈を招く要素がないわけではない。しかし、ここで検討してきた数々の書評には、許容されうる植民地表象とそうでないものを選別するという意味で、メトロポリスの文化が植民地の「現実」を規定していくプロセスが見てとれる。キプリングのロンドン文壇登場を後押しした批評家たちは、彼のテクストを特定の観点から読みこむことで、彼らの価値観を具現する植民地像を作りあげ、それを「現実」として提示したのである。

しかしこのような文化的力学が働いていたのは、何も百十年前のイギリスだけではない。グローバル化の進行する今日において、国境や言語の壁を越えた文学の問題を扱う比較文学的視点は、ますます重要なものになるだろう。だからこそ、他者の文学を受容することについて、十分に自己批判的である必要がある。その意味で、一八九一年前後のメトロポリスにおけるキプリング批評のあり方が提起する、異文化の文学を読むこととさまざまな問題点は、その具体的なあらわれ方はもちろん異なるとはいえず、すぐれて今日的な課題でもあるのだ。

注

(1) 以下、「メトロポリス」という用語をカタカナ表記で用い

- る。この語は、英語圏のポストコロニアル批評においては「本国」と植民地の関係性を含意するものとして使われることが多く、この点もその点を踏まえてくる。
- (2) Ann Parry, *The Poetry of Rudyard Kipling: Rousing the Nation* (Buckingham: Open UP, 1992), p. 3.
- (3) "Novels and Stories", *The Saturday Review* 65 (1888). Rpt. in Roger Lancelyn Green ed., *Kipling: the Critical Heritage* (London: Routledge, 1971), p. 36.
- (4) B. J. Moore-Gilbert, *Kipling and "Orientalism"* (New York: St. Martin's, 1986), p. 6.
- (5) Joseph Wentrub, "Andrew Lang: Critic of Romance", *English Literature in Transition 1880-1920* 18 (1975), p. 5.
- (6) Andrew Lang, *Essays in Little* (London: Henry, 1891), pp. 200-1.
- (7) Lang, "Realism and Romance", *The Contemporary Review* 52 (1887), pp. 684-87.
- (8) その意味では、キプリングが「帰国」する一年前に、エミール・ゾラの英訳を刊行した出版社が、公序良俗に反する作品を社会に広めたかどで裁判にかけられた、いわゆるウィズテリー事件が起きているのは示唆的である。
- (9) William Watson, "The Fall of Fiction", *Fortnightly Review* 44 (1888), pp. 324-327.
- (10) Gillian Beer, *The Romancer* (London: Methuen, 1970), p. 12.
- (11) Clifford Geertz, *Works and Lives: The Anthropologist as Author* (Cambridge: Polity, 1989 [1988]), pp. 4-5. 邦訳 クリフォード・ギアツ、森泉弘次訳、『文化の読み方／書き方』（東京：岩波書店、一九九六年）六頁。訳文一部改変。
- (12) Lang, *Essays in Little*, p. 201.
- (13) Edmund Gosse, "Rudyard Kipling", *The Century Magazine* 92 (1891). Rpt. in Green, pp. 105-6.
- (14) William Wilson Hunter, "Departmental Duties", *The Academy* 852 (1888). Rpt. in Green, pp. 38.
- (15) Ann Parry, "Reading Formations in the Victorian Press: the Reception of Kipling 1888-91", *Literature and History* 11 (1985), p. 255.
- (16) この点で、メアリー・ルイズ・プラットのいう「オートエスノグラフィ」の一種として、キプリングの初期作品を概念化することができるだろう。このことについては、いずれ機会を改めて論じることにした。
- (17) Parry, "Reading Formations", p. 254.
- (18) Edward Said, "Permission to Narrate", *The London Review of Books*, 16-29 Feb 1984, p. 14.

- (19) Andrew Lang, "An Indian Story-teller", *Daily News* 2 Nov. 1889. Rpt. in Green, p. 49.
- (20) Y. Y., "The Work of Rudyard Kipling", *The Bookman* 1 (1891). Rpt. in Green, pp. 130-1.
- (21) Y. Y., p. 132.
- (22) Ian Hamilton. *Listening for the Drums* (London: Faber and Faber, 1944), pp. 203-4.
- (23) Y. Y., p. 133.
- (24) Rudyard Kipling. *Life's Handicap: Being Stories of Mine Own People*, 2 vols. (London: Macmillan, 1915 [1891]). vol. 2, pp. 54-5.
- (25) Gosse, p. 110.
- (26) Gosse, p. 113.
- (27) "The Tales of Rudyard Kipling", *Edinburgh Review* 174 (1891), p. 151.
- (28) Angus Wilson. *The Strange Ride of Rudyard Kipling: His Life and Works* (London: Pimlico, 1994 [1977]). p. 112.
- (29) Kipling. *Plain Tales from the Hills* (Harmondsworth: Penguin, 1990 [1890]). p. 128.
- (30) Hunter, pp. 40-41.